

のやら。はずかしながら、訪問セールスの一件はわが家の最近の出来事である。

ここで携帯が活躍してくれた。知り合いにあらかじめ電話をする。セールスマンを返品したいと呼び付ける。やり取りは映像と音声で記録され知人と共有。最後に「実は」とセールスマンにきり出す。携帯を見せる。顔を引きつって帰る。詐欺や陥れには携帯は最高の武器になる。家庭内暴力や社内暴力にも。使い方で弱者の武器になる。

故郷に帰って、6年生の私。集落放牧の言い出しっぺで、初めての牛飼いの他にもこのように退屈しない毎日。山菜＝自然の物＝ただの物を朝市に売っても最低時給にも見合わない。生業はと問われれば、葬儀やのバイト（数件重なると社員では対応できない）、庭師（経済的余裕のあるじいさんばあさんのガーデニングのお世話）、農繁期の手伝い（息切れしそうな方の助っつ）、山菜の朝市出荷。しめて100万円前後。健康保険だけは請求書がくるが、その他税金とは無縁。国民年金は全額免税。たまの買い物は賞味期限前後の半額シールねらい。肉も魚も贅沢にいただいている。老人や山菜をクイモノに生活しているが、サラリーマン時代の味気ないころを思えば、味気ある毎日である。旨い、甘い、苦い、辛い、酸っぱい、塩っぱい、渋い。

20年前、NIRA（総合研究開発機構）で農業を工業の理論で、農業に夢を与えようとした「農業自立戦略の研究」の最終場面にタッチした。「自然てのはそんなにいけますかね」「いや一応、工業的な切り口での話だから」「そうですか」と味気ない会話であった。上司やら友達から「おまえは自分の考えで白紙のキャンバスに好きなように絵をかけ」と言われ、何もかけない自分にモンモンとした2年が過ぎた。通勤電車で吸い込まれたい思いも、今は懐かしい。「研究者の資質」について、先輩や同僚に尋ねた。「強引さ」「熱意」「好奇心」「謙虚」「現場」「根回し」「金」等。でも、強情で不勉強な私は「素人にも分かるモノ」をアウトプットできるかどうかを判断基準（私

の最後の逃げ場）として人と接した。今日、コンピューターによりデータ処理はすごいことができるようになったが、研究分野はさらに専門化細分化し、チンプンカンプンとなったようだ。

駐村研究員4年生となり、関係の方と誌上や、年1回の懇親会の席で、交流でき、刺激的であり、もうちょっと俺も頑張ろうかという気持ちだ。

我が集落放牧の牛たちに“この辺のところ（情報化社会の行く末）”の感想をたずねてみたが、聞き方がまずいのか、返答は？だった。

（島根県大田市・農業）

私の酪農新規参入体験記

高木 文生

北海道・十勝地方の西北部に位置する新得町に東京から移り住んできて7年、昨年8月に、念願であった酪農での新規就農を果たしました。今回はその過程で感じた新規参入への問題点に触れつつ、経緯をお話させていただきます。

1. 酪農研修

私の酪農生活のスタートは、新得町立の農業研修施設「レディースファームスクール」で始まりました。ここは1年制の女子寮で、朝と夕、割り当てられた酪農家（3カ月ごとに変わる）のもとに通って実習を積みつつ、週1回の講義で農業の基礎知識を学んだり、実習畑で野菜作りをしたりするカリキュラムが組まれています。実習といっても労働時間帯と報酬は一律で決まっています。短期生以外は個室を与えられ、食事は朝は農家で、昼と夕は寮で用意されます。

このような恵まれた環境で全ての酪農研修が行われていればよいのですが、昔ながらの低賃金、長時間労働、住み込みという厳しい環境で研修を積む実習生も道内各地にはまだ少なくないようです。慢性人不足といわれる酪農業界ですが、夢を持って渡道してきた若

者たちが、挫折感とマイナスイメージだけを持って帰るようでは、それも無理もない結果かもしれません。雇用する側もされる側も、前向きに酪農に取り組んでいくにはどうしたらいいのか、双方が納得できるような基準が必要とされる時期が、そろそろ来ているのかもしれません。

2. 酪農技術の習得

レディ・スファームスクールでの1年間の実習だけでは、とても酪農家として独立はできません。乳牛の飼養管理以外にも、飼料作物や機械など、あらゆる分野の知識と経験が必要です。卒業してから独立までの5年半は、個人酪農家3軒と大型法人牧場1軒で実習を積みました。

この実習期間中に、多様な経営形態を見ることで、自分の能力と適性を知り、漠然としていた経営の方針をより明確にしていけることができました。また2町での実習は、地域の特性を理解するのに非常に有効でした。

独立を考えるようになると、一刻も早く就農したいと気持ちが焦りますが、時間が許せば複数の牧場で働き、できる限り多種多様な仕事をしておいた方が後々よいというのが今の私の実感です。酪農ヘルパーになって、多数の牧場の作業体系を見るというのも選択肢になるでしょう。

実習生活を続けていく上での問題は、就農資金が貯めにくいのと、準備に必要な時間がなかなか作れない点です。研修資金などの支援制度もありますが、資金調達と技術習得を両立させるのは、現状では至難の技です。より利用しやすい制度の見直しが望まれます。

3. 就農まで

就農地が決まるまでが、新規就農の最も長い道のりと言っても過言ではありません。私の場合、すぐ使える牛舎などの施設のある離農物件が町内になかったため、昔の実習先の紹介で、9.6haの牧草地を購入し、施設は新築することにしました。離農跡の農地は小作などで維持されているものの、牛舎などの施設

はまだ使えるものでも放置され、数年後には老朽化して使えなくなってしまう例があちこちに見られます。一方で新規就農希望者は、希望通りの物件が見つからず、タイミングよく出てきた場所に決めてしまう傾向があります。初期投資の額を抑えるためには、即使える施設に入るのが一番です。ここでも仲介者の存在が望まれます。

さて、土地と施設は自己資金で何とかまかなったものの、牛と機械の購入分は町の新規就農資金に頼ることになりました。新得町独自の制度で、1,000万円の無利子貸付（10年償還、3年据え置き）と初妊牛10頭の貸与（開業後、生まれたメス子牛で3年以内に返す）が受けられるのです。制度を利用するには、計画書を提出し、役場、農協、普及所などの関係者が出席して開かれる会議で認定を受けなければなりません。昨年5月に認定を受けてからは、牛舎と搾乳棟の施工、作業機械の購入、市場での牛の購買と息つくまもなく準備は進み、8月26日に乳牛13頭から搾乳をスタートしました。その後、初妊牛の分娩や経産牛の追加で、牛は21頭にまで増え、現在に至っております。

最後になりましたが、女性の単身での酪農独立という無謀な試みを何とか実現できたのは、関係者の皆様のご協力の賜物です。特に町内の5軒の法人牧場からは、人手・経産牛・資材の提供を受けて、走り出しの大変な時期をようやく乗り越えることができました。また、新得町では公共のコントラクタ事業が未整備のため、牧草の収穫作業も法人に請け負ってもらっています。経営を早く軌道に乗せて、微力でも地域にお返しができるようになることが、現在の私の目標の一つです。

搾乳を始めて5カ月が過ぎましたが、まだまだ新米酪農家には無我夢中の日々が続きます。もう少し余裕が出て、広い視野を持てるようになった頃、また皆様にいろいろとご報告できるかと思います。もし、ご意見・ご質問などがございましたら、お聞かせ下さい。

（北海道上川郡・酪農家）